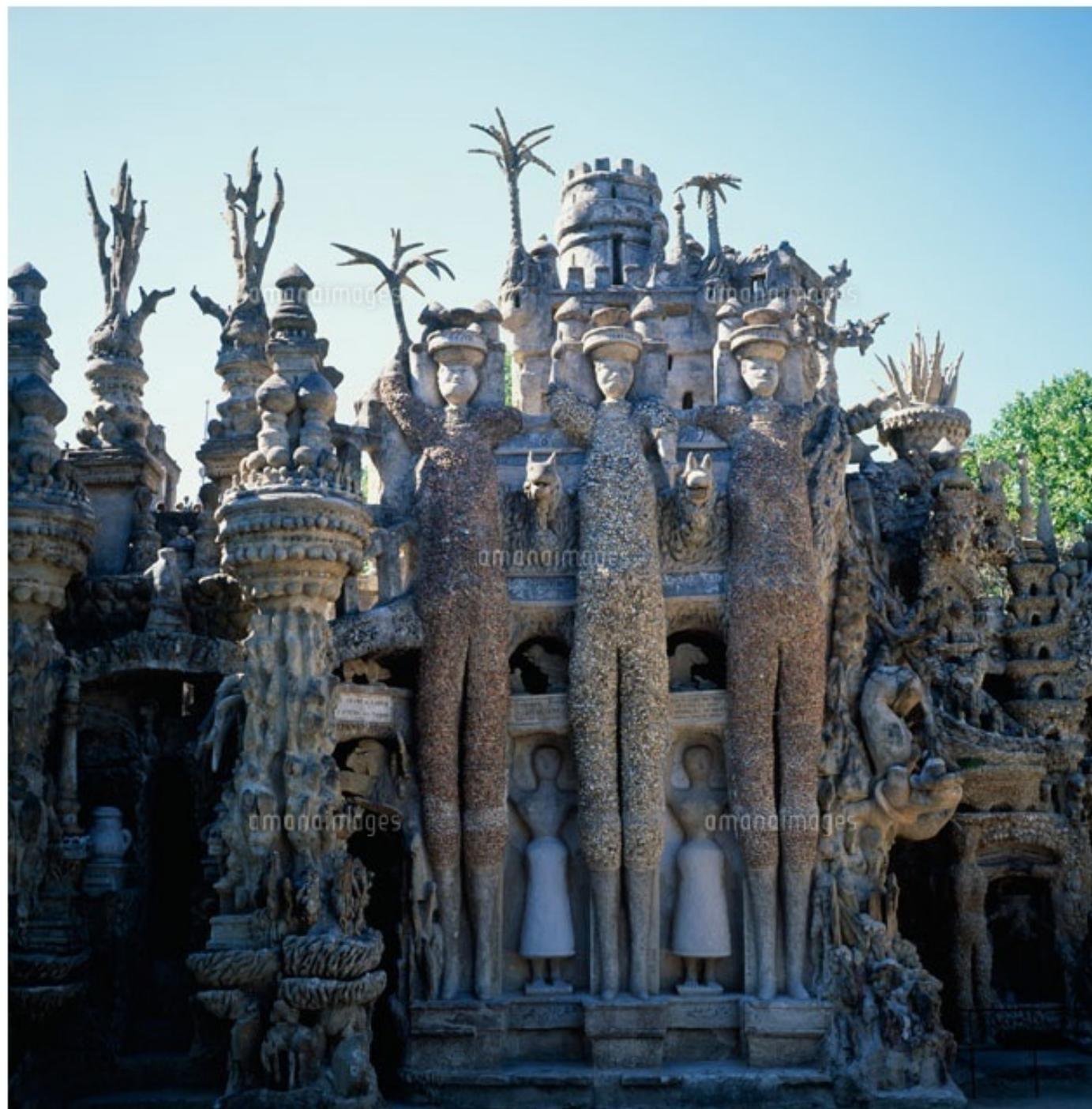


建築家の檻



連載 5

Grasshouse

午後三時頃、部屋を片付けていると、携帯電話が鳴った。

――あ、もしもし。俺、色川。ドモ。どうだった昨日。

――どうだったじゃないですよ。日程違うって言われちゃって。

会議室で幹部連中に囲まれて参りましたよ。まるで法廷みたいだったです。

――日程？ それって俺か、間違っただの。

向こうが年寄りだから呆けていたのでは、ないの。

そんなことより、七時過ぎに新宿来ないか、例のボトル入っている店。

いや、なに。お前さんに、会わせたい人間がいるんだよ。

――飲むのは、いいですけど。

あの、昨日の件、「そんなことより」……で、済ませて欲しくないですよ。

もう少し、あそこの情報くださいよ。何が何だかわからなくて、

もう、冷汗出ちゃった。

――経験、経験。な、俺様なんざいつも出たところ勝負だ。

それでも、この丁々発止の話術でもってな、今日まで生き延びて来た……。

じつをいうと、前から思っていたんだが、お前さんはもっと場数を踏んで、

アドリブや、応用力というものを、身につけないと。難しいな、この業界。

もともと、人生というものは、キミが思っている以上に、不条理なもんだ。

な、羽木よ。ツトム君よ。

なんなんだろう、この人は。

いつも自分のミスを一般論にすり替えて、最後はこれみよがしの説教にしてしまう。僕は途中でうんざりして、いい加減な返事をしながら、電話を切った。

そういえば、会長取材のときに名刺が切れかかっていることを思い出した。初対面の役員に挨拶するたびに減っていくので、ひやひやものだった。

僕はコーヒーを淹れなおしてからデスクの前に座り、残っている名刺を数枚広げて、あらためてじっと眺めて見た。

「羽木務・はぎつとむ」というのはペンネームで、僕の戸籍名じたいは「萩原勤・はぎわらつとむ」だった。

小学生の頃から、あまりこの本名が好きではなかった。静岡から東京に出て来てすぐの学生時代に、世田谷の梅ヶ丘にある羽根木公園の脇の古い二階建ての安アパートに住んでいた。

大学入学そうそう、キャンパスの門の周辺で待ち構えていた不動産斡旋バイト学生にとっ捕まり、そのまま地元の不動産屋を尋ねて決めたアパートだった。

「ふんふん。キミみたいな奴に向いている物件があるから、いますぐ行くべし。ここねえ、じつは僕自身が住みたいぐらいのところなんだ。周りは緑豊かな公園だし、すぐ傍に図書館はあるし、新宿はもちろん、下北沢で乗り換えれば、渋谷にも吉祥寺にもすぐ行ける。どう？ いますぐ行かないと、別の奴に取られちゃうよ。何しろ他の奴も紹介しているわけだからね、ちょっといい物件は、引く手あまたなわけなんだ」

バイト学生は、丸いメガネをかけた神経質な法学部の学生で、彼に小さな地図を渡され、小田急線に乗り込んだ。

なるほど、いざ暮らしてみると、丸いメガネの神経質な法学部の学生は、決して嘘は言っていなかったように思われた。落ち着いた環境は、なかなか良かった。

暇になるとよく、僕はよく小高い山になった公園の遊歩道を散歩した。

春先は梅の名所になって、白い花が鋭い透明な匂いを発散させて、斜面を覆っていった。下北沢の居酒屋で知り合った赤峰菜というイラストレーター志望の美大生の女の子と、よくその斜面で寝転がったりした。

菜という子は、名前に反してぜんぜん読書家ではなくて、活字嫌いで、むしろ当時流行り始めたボーイズラブだか何だか、変な漫画を読み過ぎていた。少し露出症の気があるのか、公園に人影が見えないとき、かなりきわどいことをした。隠れるための樹木の影は、幾らでもあった。

それでも市民公園では、不意に犬を連れた老人が、木立の向こうに現れたりもする。木蔭で腕を重ねていちゃつきあっていた僕たちは、ある日、くんくんと鼻をひくつかせている耳の垂れたブチ犬と、いきなり目が合った。その分別臭いビーグル犬は、若者が公園でふとどきなことをしていないかどうか、仔細に監視しているような顔をしていた。

飼い主の老人は、僕たちに気がつくやうと、不機嫌そうな顔をしながらも、後の世代への礼儀上、グイッと鎖を引っ張った。任務中断になったビーグル犬は、いかにも悔しそうな顔をして、こちらを二三度振り返りながらも、せかせかと先を急いだ。

いつだったか、下北沢で泥酔した明け方、二人でもつれあいながら僕の部屋へ行く途中、菜は不意に何かを思いついて、僕を追い越し、低い階段の先にまわった。

こんなに酔っているのに、よくそんなエネルギーがあるなと思っていると、急にジーンズをまくって、白い下腹部を得意そうに朝の光にさらし、ついでそこにしゃがみこんで、下をのぞき込むようにして、おしっこを始めた。

階段の下の方から見上げている格好になった僕は、啞然とした。

最初はちょろちょろと遠慮しがちに、すぐさま、勢いよくほとばしり出した生温かい金色の液体が、石の階段を下りていくのを、菜はうっとりとして、子供のように眺めていた。下の道路を見渡し、いささか僕は焦った。もうそろそろ、新聞配達や牛乳配達の下の道を通ろうという時間で、ちょうど、朝陽が樹木たちを、鮮やかに澄んだ光線で浮き上がらせている頃だった。

菜の体の奥から出てきたぬるい蜂蜜色の液体には、虹色の細かい泡が浮いていた。周囲を気にして「しょうがないなあ」などと呟きながらも、僕は半ばあきれ、半ば面白がっていた。

そんな突拍子もないことをやらかす赤峰葉のことは好きだったが、一年足らずで別れてしまった。「もっと大事にしてくれそうなおじさん」と出会ったというのだ。

四十過ぎで、葉が行ったことのないような麻布のワインの店に連れて行ってくれるような、ちょっとしたお金持ちらしかった。

僕はショックを受けたが、意地になってもいた。怒ったような顔で「いいんじゃないの」など突き放したようなことをいわずに、もう少し素直になっていればよかったと思う。葉はきっと、わざと僕を試していたようにも思う。

後になってその「おじさん」は、何とかいう新興宗教がらみで、好奇心旺盛な彼女を弄び、変な仕事で貢がされているという黒い噂を聞いた。その男は、普通のサラリーマンでは、なかったのかも知れない。

葉に振られた後でも僕は、何とか気を取り直し、大学には最低限行くようにして、天気の良い日には、すぐ傍の図書館で借りた本を片手に、日向になった芝生の斜面でごろごろしているうち、いつしか昼寝をしていたりした。

ずっと後になってから、僕はこの辺りが『楡家の人びと』の舞台になっていることを知った。青山墓地の手前にあった有名な青山脳病院が移転したのは、この羽根木公園下の麓の一角だった。

その頃はすでに病院は移転し、芝生の中にブランコや滑り台が覗いているだだっ広い養護施設の敷地が変わっていた。『楡家』の作者の父で、病院の院長をやっていた斎藤茂吉の歌碑は、赤堤道路沿いの木陰に、ひっそりと残されていた。

いまでもあの辺は、緑の多い静かな住宅地のままだ。少し坂の高低差があるけれども、こんもりとした仄暗い木陰の道があったり、さやさやと葉擦れの音をたてる竹林があったりするので、散歩をしたり、自転車でゆっくりと流すには、なかなか良い環境だ。

大学卒業後、名のある出版社を幾つか落ちた僕は、小さな出版社や広告プロダクションを転々として、編集者、ライター、コピーライターをカメレオンのようにこなしていた。そんなふうというところちょっと恰好良いけど、要するに便利屋、何でも屋みたいなものだった。

しかしその頃、僕は、自分で造った牢獄や檻の中に閉じ込められているような気がしていた。見えない牢獄、不可知の檻、そんなものが僕の周辺を固めている……そんな気がして仕方がなかった。自分から何を欲しても、何を意志しても、うまくいった試しがなかった。優柔不断で、強く自分自身を肯定できない。

比較的ましなことは、皆、他人からおしつけられたり、引きずられた結果だった。一応は、温和な性格を装い、環境の中で息を殺しているだけで、どうも人生がうまくいっていないと思った。つまり自分の意志で、人生を構築していないのだった。

そのうちフリーのライターになってから、何かペンネームを作ろうと思って、萩原から「原」を一字取って文字を替え、「羽木」にしておいた。羽根木公園周辺の風景が、懐かしかったからだ。どこかにこのままでは駄目だ、自分を変えねばならないという、変身願望も、あったのかも知れない。

ついでに「勤」は、「務」にかえた。その理由は……。

—その理由は、ある蒸し暑い夏、同世代で、幼女殺人事件で世間を騒がせた一人の青年が出たためだった。あの事件は、オタクという言葉が流行った頃のことだ。酷暑の中、山の中の黒土が掘られ、幼い腐乱死体が幾つも出てきた。あの忌まわしい事件については、当時勤務していた恵比寿のデザイン会社の連中と、よく飲屋で話し込んだものだった。あの坂の多い町の中に、アイリッシュ・バーから焼き鳥屋まで、新しい店がどんどんできていた頃だ。一見、楽しげな飲み屋の空間の片隅で、僕たちは、いかに引き籠りの「彼」が異常で例外的かということ、饒舌に語っていた。

名前を変えたものの、僕は、彼を糾弾しようとか、そういうつもりはまったくなかった。幾つかの理由により、他者とのつきあいというものが不得手だった「彼」は、おそらく生きることの何処かで躓き、幼女たちの腐乱臭の立ち込める暗くて細い湿った林道に、いつしか紛れ込んでしまったのだ。

カメラにさらされて戸惑っているメガネをかけた凶悪犯は、ごく普通の小心で神経質そうな青年の顔をしていた。法的には死刑になるしかないような異様な犯罪に走るしかなかった「勤」という青年の心の闇が、ひたすら悲しかった。

彼はいわば、僕らの世代のシャドウ、つまり影の人格だった。このシャドウという言葉は読書家の友人に教わったのだ。何でも心理学用語らしい。彼は評論家よろしく、何でも饒舌に分析してくれるので、友人達は彼に反発しながらも、何かと重宝にしていた。

何年も後になって、あの羽根木公園に望む安アパートを訪ねて行ったけれども、その一画はすでに風景が変わり、色とりどりの屋根で装飾された瀟洒な一戸建てが、何軒か並んでいた。柵の向こうには、子犬ぐらいは飼えそうな狭い庭もついていた。

僕がしばらく佇んでいると、その住宅の薔薇のアーチで囲まれた裏木戸から、若くて綺麗な奥さんが、小さな男の子の手を引いて、公園に出て来た。

幸せそうな微笑みを浮かべている彼女は、ちょこちょこ子供と同じ歩幅で歩いてみせた。子供は上を向いて、母親の腕を両手ですがりつくように握って、笑った。

ここは小高い丘陵になった緑地そのものが地続きの庭になっているような、とても羨ましい環境だ。

ふと見上げると、昔と同じ高く並んだ樹木の梢に、透明な金色の陽光がきらきらと戯れていた。

階段の上から、酔った赤峰葉が流していた蜂蜜色のおしっこや、透明な朝の光の記憶や、鼻づらをつきつけてくるビーグル犬の記憶が、甦った。

僕はそのとき、歳月というものを感じた。

デスクの前でしばらくそんな回想に浸り込み、溜息をつきながら、残っている名刺を整理して、ポケットに入れた。

部屋を出ようとする、母親から連絡が入り、家を改築する件で相談したいので、一度静岡に来てくれないかと言う。

改築の話は昨年あたりから出ていたが、僕はあまり関わりたくなかった。幾つかの現実が未整

理の箱のように乱雑に積み上げられている。その二三は、何年もほったらかしのままだった。仕事が忙しいことを理由に、断り続けていたのだ。今回もいい加減に返事をしておいた。

家を出でてから下北沢で乗り換え、渋谷の書店に廻るため、井の頭線に乗り込んだ。

車内には明るい蜜柑色の光が斜めに射して、混み始めた乗客の影を映していた。車両とともに、吊り革がいっせいに揺れる。

電車の中で、昨日のインタビューのことを思い出した。こんなふうにもやもやと頭に浮かべて取材内容を眺めているのも、仕事なのだ。これから乱雑に披露された話の前後を一冊の本にするために、組立て直さなければならない。時系列的に並べればそれでよいというものではないからだ。

会長は自分のことを語っているときに限っては、なかなかの好々爺といってよかった。企業や経営のことから離れて、自分の過去の思い出を語り、それに感心して耳を傾けてくれる人間がいるということは、老人の精神衛生上良いことなのかも知れない。

その時、九階の会長室にいたのは、丹下会長と僕と例の若い美人秘書だけであった。鷺の剥製や、虎の毛皮が、この豪華な部屋の訪問客を睨みつけていた。

最初の日、福島の子供時代の話を懐かしそうに話していた。

実家の庭に、あかあかとした柿の実が重たげに実ること。寒くなるとそれを家中で軒先に吊るし、干柿にすること。真冬には近くの沼が凍り、スケートができたこと。早春、氷の割れた小川でまだ寝ぼけた泥鰌を採ったり、野原で芹を採ったりしたこと。家の屋根裏に棲んでいた巨大な青大将に「平八郎」と名付けていたこと。

「バルチック艦隊をやっつけた東郷さんのことさ」老人が顔をあげ、同意を求めするように笑うと、僕も秘書も笑ってみせねばならなかった。

この演技では、芳田慶子という名の秘書の方が、はるかに上手だった。いかにもおかしそうに手を口元にあてクスッと笑うので、会長のお気に入りなのだ。

「お前さんは、おきゃんな娘だのう」

会長は鬼のような顔を崩し、微笑むのである。おきゃんなどという言葉は、いまはもう、時代劇にしか出てこないボキャブラリーだろう。会長の話は繰り返しが多かったし、エピソードを羅列するだけで、時系列的な配慮はまったくなかった。

しかも、話をしている間、第一線を退いているはずなのに、頻繁に電話が入ってくる。それはグループ内では何をするにも、会長への「挨拶」が必要だかららしい。

話が盛り上がっている途中でも、『丹下エステート』『丹下不動産』などの系列会社や、塗装会社や重機会社、運送屋などから夥しい電話があった。商談のほかに、単なるご機嫌うかがい、さぐりの電話もあるようだ。具体的な指示を仰ぐものではなくて、若頭や子分たちが、元締である大親分に「挨拶」を入れているといった印象だ。

電話の度に話は中断され、中座する。

そうになると、ソファに戻って来た八十歳の老人は、どこから続けていいのか分からなくなってしまふ。僕が話を向けても、再び青大将の「平八郎」の話に戻ってしまうのだ。話の前後関係は無

茶苦茶だった。勿論、あとで僕が録音内容から、丸ごと構成し直さなければならない。これでは前任者が匙を投げてしまったのも、わかるような気がする。

昼になると近所の店から、豪華な松花堂弁当を取り寄せてくれ、三人で食べた。ひとつ二千元はするだろう。

箸を動かしている間「あんたは、学校はどこだ」と訊かれた。

「ほう。その大学だったら、ウチにも何人かいるな。確か設計の有沢と山室がそうだろ」

秘書に言うと、彼女はこくりと頷いた。

「わしは、学校は出とらんのだよ」と老人はぼそりと言った。「……田中角栄もそうじゃった。ホンダの本田宗一郎も、ナショナル・パナソニックの松下幸之助もな」

何かそこには、天才的な政治家や、偉大な創業者というものは、既存の学問なんか関係ないといわんばかりの押し付けがましさがあった。しかし悪いけれども、正直言って、彼らと丹下喜作氏とでは、スケールがずいぶん違うだろうとも思う。

午後会社を出ると、ほっとして肩から力が抜けていく気がした。

それでも老会長の頑固な個性が、背中あたりに膠のようにべっとりと貼りついているようで苦痛だった。

井の頭線を降りると、雑踏の中で携帯電話に範子から連絡が入り、今夜は遅いかどうかを探ってきた。声が聞こえにくかった。多分遅くなるというと「仕事ばかりやって、つまらない奴」と言われ、当てつけのように切られた。

渋谷の書店で、僕は建築関係のコーナーに向かった。

ある建築雑誌に『丹下建設本社ビル』の印象的な写真が出ていた。

朝焼けを背景に撮影されているので、余計に「軍艦」イメージが強まっている。驚いたことにこの奇怪な建築は、賞を獲っているらしい。

設計は鷺巣数光とあった。建物の下に、顎髭を生やした彫りの深い顔立ちの男が、小さく写っていた。日本人というより、外国の役者のように見える。ドイツ人といっても通じるエキゾチックな風貌で、なかなかの二枚目だった。しかし、あの建物の持つ禍々しい雰囲気、どこか通じる雰囲気を感じた。

――僕は鷺巣数光という建築家に、少なからぬ興味を覚えた。

この世界について、少しは情報を入れなければならない。二、三冊の書物を買込み、近くの喫茶店でしばらく目を通した。

そこで時間を調整し、混み始めた山手線に乗った。電車はやがて原宿を過ぎた。

こんもりと盛り上がった暗緑の明治神宮の森が、しばらく続く。

冬が近いので、樹木は疲れたような重たげな色合いをしていた。夕闇の中、風景は蒼い空気に沈み始め、遠方でもちらちらと光が見え隠れするようになってきた。

夜、新宿には猥雑なネオンが点滅し始め、新宿通りの藍色の水底の交差点を、黒い人々の群れが一斉に横断してゆく。コートの襟を立てたサラリーマンや、紙袋を抱えたOL、髪を茶色に染めた学生たち。

寒気に引きしめられた風景は、電飾看板の蒼ざめた照明でせわしなく刺激されていた。

月だけが薄金色の磨き上げたような光を放射している。夥しい自動車がフカのように黒びかりする背を並べ、ヘッドライトを光らせながら、ゆっくりと一定方向へと移動していく。

小暗い遊歩道に入ると、段ボール箱や壊れ傘で覆われたホームレスたちの寒々とした住居が、獣の巢のように点在していた。植え込みの繁みの中に、ぼろぼろの革靴を履いた両足が覗いていた。

都市の底にこびりついた垢のようだ。最近では、地下鉄構内にも段ボールの重なりが増殖している。

暗幕のような夜空には、巨人のような高層ビルの影が幾つも並び、その背後に東京都庁の堂々とした城郭のような建築が、屹立していた。

夜の寒気はゆっくりと対流し、微かな憎悪を帯びた冷光を放った。

僕は遊歩道を過ぎて飲み屋街の路地裏に入り、色川さんの行きつけの店『サビーヌ』のぎしぎしと軋む急な木の階段を登っていった。

いつもながら、黴臭い。

店に入った途端、薄暗い奥のカウンターの脇で、色川氏がにんまりと笑い、太ったからだを中腰にし、両手を振り振りおいでおいでをしていた。二階の狭苦しい店の薄闇の中、客の顔だけが明かりに照らされ、浮かび上がっている。

古いジャズ。でも、嫌いではない。かすれたようなレッド・ガーランドのピアノが鳴っていた。タバコの煙が幾層にも薄く重なって天井を這ってゆく。

「ごくろう、ごくろう。あのな、紹介する。こちら辛島四郎さん。俺の先輩だ。それでこっちが今、丹下会長のゴーストライターをやってもらってる羽木務君」

辛島氏は口からパイプを離すと、中腰になり僕と名刺を交換した。『経済人脈社編集部』とあった。（ははん。この人が『自分史』の前任者のジャーナリストだ）

ぼさぼさの洗っぱなしの髪の毛はほとんど灰色だが、まだそれほどの年ではないだろう。細縁のメガネの奥に、優しいとも鋭いともいえる独特の眼が光っている。昔の左翼系知識人といった印象だ。よく使い込んだらしい栗の実色のパイプが、妙に似合っていた。「色川ちゃん、こっこの彼は、同じのでいいの？」

ママさんが片手を太い腰に当て、タバコを口から離れた。酒で声がすっかり潰れている。「いい、いい。何でもいいの、こいつは」

初めてこの店に来たとき、奥のトイレに、黒ぐろとした陰毛剥き出しの彼女のヌード写真が貼ってあったので、びっくりした。まだ二十代のアングラ女優時代のポスターらしい。

ママはとっくに四十を越えているのだが、露出癖があるのか年に二度くらいはお客に寄せられ泥酔して、「きょうは、特別サービスよ」などと言いながら、店のカウンターに上がって服を脱ぎ始め、裸になってしまうことがあるという。

「今けっこう、興味深々な話を聞いていたんだ。いやあ、同族会社ってのは、ひどいもんだね、いまさら何だけど」色川さんが言った。

「いたるところに、監視カメラがついてましたよ。びっくりしちゃった」と僕。

「あそこはね、つまり北朝鮮だよ。言ってみれば」

辛島さんは頷きながらにやりと笑うと、パイプの端をなめた。

彼は両手の白くて細長い指を、お遊戯のように開いたり閉じたりしながら話す癖があった。黙っているときは、その両手を顔の前できれいに組んでいるのだ。象のような眼は、薄く微笑している。

「確かにあの会長の銅像は、そうですね。会長とは、どういういきさつだったんですか」

「うむ。実はですねえ、二ヶ月ほど前に、あそこの総務の古森という男から連絡があってね、会いたいというんだ。仕事はご存じの通り『自分史』作成。しかし、結局ボクが途中で、あの企業の体質や、喜作会長の過去に、ジャーナリスティックな関心を持ち過ぎてしまったんだな。それがホサれた第一の原因。

この古森という男も、曲者でね。きわめて日本の企業人的というのか、責任の所在を曖昧化させるような喋り方をする奴なんだな。古森の背後にいたのが、専務の律子と副社長だというのは、中に入ってから分かった。あの会社も現在、かなりの経営悪化に苦しみ、内部も分裂状態にあるらしいね」

カチャリと軽い音が響いて、氷が崩れた。

緑、黒、褐色。スコッチやバーボンの半透明の壺がぎっしりと並び、背景の古びた鏡面に色彩鮮やかな影が映り込んでいる。鏡の銀箔は、ところどころ剥がれている。

隣で色川氏はしきりに頷き、世間のことなどすべてお見通しだとももいうような顔つきで、グラスの氷を中指でかき回している。汚い癖だが、飲むときはいつもこれをやる。

「分裂状態というのは、派閥があるということですか」

「あなた、誰に会ったの、あの会社で？」

含み笑いをするように辛島さんが訊いた。

まず話を、朝のボランティア隊の清掃活動のところから始めると、二人は大いにウケていた。僕はますます調子に乗って、いきなり廊下に飛び出してきたフェルディナンドという大型犬や、金糸の刺繍で飾られた豪華ベッドの赤ん坊、侍従めいた男の話、法廷のような会議室の模様を、披露した。

「なるほどね。自伝の作成に、幹部連中がこぞって参加させられるなんてのは、同族会社らしいや。

とにかくすべてが丹下ファミリーの私有物になってしまっているんだな。もちろん、まず喜作会長の超ワンマンぶりが、言語同断。それに、女帝といわれる長女の丹下律子、こいつが癌だ。それに無能な長男の社長。例のゼネコン汚職事件の時は、あそこもかなりヤバかったんで、御大がしぶしぶ引退したわけ。そして蒼い眼の聡太郎を据えた。まあ、喜作爺さんが実権を握り続けるために、わざと無能な長男を据えたという穿った見方もあるけど」

「つまり、院政を敷こうとしたわけだ」と色川さん。

「社長というのは、体がヒグマみたいにでかくて、外人みたいな人でしょ」

「そうそう。丹下聡太郎。ありゃロシア人の血が入っているんだ」

へーえ、と僕は思った。

会議中にフンフンと鼻歌を歌っていた、どこことなく愉しげで哀しげな社長の姿を思い出した。

「丹下の爺さんが、まだ二十代で満州にいた頃、ハルピンのロシア人娼婦との間にできたのが、あの長男だ。別に知的障害があるわけじゃないし、普通の大学まで行ってるわけだけど、でもどっかおかしいんだな。喜作が引退するとき、当然あいつに社長が務まるかどうかって、内部でいろいろ危惧されたわけ。でも例によって、ワンマンの鶴の一声で、聡太郎に決まっちゃった。あの爺さん、なぜかあの青い眼の長男に、凄く執着しててね。そのロシア女に思い出があるんだろう」

曲がマイルス・デイヴィスに変わった。

デリケートで柔らかなトランペットの金属音。

「でも丹下建設といったら、一流ゼネコンでこそないけど、まあそこそこの規模でしょう。僕ですら名前を聞いたことのある中堅建設会社ですよ。それでよく、会社がいままで持ってきましたね」

「いや中堅は褒め過ぎだね。あそこの社員連中は、準々大手と自称しているけど、ボクだったらもうひとつ『準』をつけますね。なにしろ発想が、土建屋体質から一向に抜け出していないじゃない。しかしまあおっしゃる通り、小さくはない」

「あのドスの利いた声なんか、ヤクザの組長みたいなのところあるもんな、丹下の爺さん」

「近いでしょ」辛島さんが冷ややかに言う。「ただね、あそこがこれまで持ちこたえてきたのは、『七奉行』とも『七人の侍』とも言われる、有能なグループの存在があったからなんだ」

「『七奉行』か。家族だけじゃ、やはり経営は無理ですよ」

「もともとは、ワンマン社長の丹下喜作とともに、あの会社を大きくしてきた連中なんだ。でもある時期から喜作が、一種の社長病、つまり自我肥大病に陥ってきた。叩き上げには、ありがちなんだけど。そこで連中、考えるところがあったんだな。このまま大陸仕込みの土建屋体質の喜作サンのやり方を踏襲していたら、自分たちが危ないってね。その七奉行の筆頭が、いま副社長の丹下伸雄。もともとは高村伸雄といって、営業のかなりのやり手で、何とか社内の意識改革を考えていたんだが、結局婿養子にされて、丹下家にうまく取り込まれてしまった。

もちろん営業だから、贈賄だの談合だの、あそこの恥部は全部知ってる。何かあったら現副社長の伸雄こそ、真っ先に地検にやられる人物だからね。彼が工作をして、路線がある程度固まった後、おもむろに喜作が登場してきてフィックスするのがあそこのパターン。丹下建設は独自の技術力などないけど、マンション以外に龍田建設あたりといわゆるJV、ジョイントベンチャーで公共工事やダムなども造ってきた。それも政治家を巻き込んでのダムのためのダム、建設のための建設ね」

「副社長の丹下伸雄って、でもボランティアで舗道を箒で掃いていた時は、そんな悪者には見えなかったけど」

「談合がいけねえっていうけど、おめえ」

突然、奥で俯いていた初老の職人ふうの男が顔をあげ、しどろもどろの口調で言った。

ここの常連客らしい。

「町内会だって国連だって、みんな談合じゃねえかよ。要するにありゃあ、アメリカのゼネコンが、仕事取れねえんで、うるさくいつてきてるだけの話じゃねえか」

「源さん、もう酔っ払ってるのォ」ママが水割りを作ってたしなめた。

「いやね、僕は別に談合のすべてが悪いとは思わないですよ」と辛島さんは言った。「業界を安定させるための生活の智恵でしょう。ただ、政治家や官僚などの行政が絡んでくるとね。僕はつまりセコイわけですよ。ご立派な社会正義とかじゃなくて、単に税金の使われ方にセコイんです」

「そりゃそうさ。区役所や都庁ばかり、でかい建物作りやがってなァ。俺なんか、いつ段ボール暮らしになるか、わかりやしねえ。エヘヘ」

源さんはまた、人の良いしょげたような笑いを浮かべ、眠ってしまった。

「面白いのは、この『七奉行』の一人は丹下建設の人間じゃなくて、当時の建設技官だという話。つまり、いま顧問をやっている谷田部という天下り。実は僕はこの谷田部を、ずっと前から追っかけててね。俳句をやる男なんだ。『竹林会』とか称する発句会を組織している。ところが、谷田部は俳句を隠れ蓑にして、妙な工作をやるんだよ」

「ああ、例のございますを連発する、馬鹿に丁重な物腰の紳士ですか」

「うん。ヤクザもどきの喜作とは、正反対のタイプだね。例えば入札の直前に、料亭で俳句の会を開くんだよ。ある川の護岸工事の競争入札の直前には、『五月雨の水の淀みの深さかな』という句が手渡されたり、ダム建設の時は『九輪草そよいで涼し池の端』なんて句が示された。ロクな俳句になってないけど、五とか九とか数字が入っているだろう。

これは季語とは関係なく、暗号なんだよ。落札価格の。むろん億単位だが。出席者に暗号を解読させて、つまり行政側の機密を漏洩しているわけだ。谷田部は建設省を辞めた二年後は、丹下建設に高い報酬で雇われている。ここでもいわゆる業務屋の仕事で『竹林会』を利用し、俳句や川柳を隠れ蓑に、後輩の現役官僚や、OB連中と情報を交換し合っているらしい。後輩の現役官僚に先輩の天下り官僚が俳句の添削するんだからね。意味深だろう？」

「ずいぶんまた風流な、機密漏洩ですね」

「あの会社の監視カメラの異常な多さというのは、内部分裂と関係あるのかねえ」

「会長と長男の系統と、専務の律子と副社長の伸雄派との主権争いは、あるにはあるんだけど、それ以上にファミリーの疑心暗鬼が凄いね。いつ社内の不満分子によって、会社を転覆されるかわからないという。……実際辞めていった奴によって、過去の贈賄が暴露されそうになったことがある。あの時は、非常に厭な失踪の仕方をしたけどね」

「失踪、ですか。気味悪いな。それにしてもあの律子という人は、ちょっと異常性格ですね。傲岸不遜。いつも毛皮のコート着込んだままだし」

「隣にただで体が凍り始めるという、社内ジョークがあるらしいけど。ところでTCIAって知ってる？」

パイプを弄びながら、にやにやした顔で辛島さんが言った。

「丹下建設のCIA、中央情報局だよ。丹下律子の総務部のこと。総務と経理は完全にあの女帝

に握られているからね。裏でいろんな網をめぐらして、社員の内部情報を調査してるんだ。今度、パソコン目安箱制度というのを、導入したらしいじゃないの」

「何それ、何それ？」

嬉しそうに色川さんが、身を乗り出した。

「つまり、社員のパソコンと、社長室とを直結させて、電子メールで情報を収集するのよ。社長というのは例の長男の丹下聡太郎で、こいつはあの通りのヒグマさんだから、たんなるオモテ看板でね。要するに長女の律子のところに、社内情報が一極集中するんだ。『提案』と称して、社員をお互いに監視させ、ミスや欠点を報告させるというね。ま、体のいい思想調査だな。いいネタを提供した社員には内密に寸志が与えられ、『提案』の常習者として取り込まれていく。好都合な情報を律子はピックアップして、老いたワンマン会長をいのように動かし、人事権を握る。フーキ課といわれる憲兵隊もいるしね」

「ほおーっ」色川氏は感動のあまり、大きな顔を震わせた。

「だから丹下律子は、いわばT C I A長官なわけよ」

「そんな企業あるんですか。いまどき」

「どうもこれは僕の読みなんだけど、喜作会長は自分の会社で、満州時代の記憶を再現してるような気がするんだな」

「満州時代の記憶ねえ。社員としては、はた迷惑な話だな」

「それとだ」拳の間からパイプの柄を突き出し、辛島さんは椅子に座り直した。

「その天下りの顧問、谷田部憲彦という男。奴を尾行したときのことだけど、原宿の表参道から少し奥に入ったところにあいつ、秘密のマンション持っててね。これが偶然、ボクの友達のプロダクションの斜向かいの部屋なんだ」

色川さんがごくりと唾を飲む音が聞こえた。

「あの温和そうなおじさん、渋谷辺りで夜中に電車で帰れなくなった中高生の女の子捕まえてね、その秘密の部屋に連れ込んで、オイタしてるのよ。どうやらその隠れ家は、その道専用みたいなんだ。僕はある収賄のネタをつかんで、友達のプロダクションに張ってたわけ。偶然近くにあるんで、待機させてもらった」

「谷田部って、律子のかなりのお気に入りですよ」

「よく観察してるじゃない。表は教養ありげな紳士、裏はとんでもない偽善者だ。その夜はたまたまその友達の事務所でビールを飲んで、馬鹿話していたんだ。彼ははバードウォッチングをやっていて、野鳥の会のメンバーでね。写真歴は古くて、瑠璃色のカワセミや黄緑色のウグイスとか、宝石みたいに綺麗な鳥の写真見せられてたんだよ。……と、いきなり谷田部のマンションの電気が点いたわけ。それで、オオっと思って、友達と一緒に望遠鏡で覗いてみるとだ」

色川さんは、大きな暑苦しい顔に陰しい皺を刻み込んだ。

「あれは夜中の二時頃だったかね。植込みとカーテンでよく見えないんだけど、何か肌色のものが動いているんだ。（彼は店内を気にした）よく見ると子供みたいな娘が裸に剥かれて、初老のでっぴりしたオヤジがのしかかっているんだ。驚いたね。相手は中学生か、せいぜい高一ぐらいの少女。娘というよりも孫に近いよ。女の子はほとんど酔ってて正体なかったね。メガネを

外した谷田部は、まるでベッドの上の太ったセイウチみたいだった。ロリコンのセイウチさ。今度、現場写真でも撮ってやろうかと思ってるよ」

「淫行だよ。そりゃ淫行」色川さんが嬉しそうに両手を擦った。

「上品そうな人なのに。あの谷田部さんがねえ」

温厚そうで馬鹿丁寧な敬語ばかり使う紳士と、今の証言とが結びつかない。僕はフランスの作家ジイドを連想したが、善良な小児科医や大学の名誉教授といった連想も湧く。

「ウフフ。なあに。面白そうな話してるじゃない、辛島さん」

ママさんが新しい氷の塊を砕きながら、ハスキーな声で言った。こういう話には興味を示す。小さな氷の破片が顔に飛び散った。

「まあ、私生活はどうでもいいんだ。実は僕が前から谷田部を追っていたのは、あの秘密の部屋そのものが、もともと丹下建設から、建設官僚時代の谷田部に提供された物件じゃないか、という疑惑なんだ。それと、例の元社員の失踪事件が絡んでいる。マンション自体は、大角建設の施工になっているけど、これは丹下のダミー会社みたいなもんだしな。社長の大角文次は、喜作の土建屋時代、焼け跡整地時代の子分だよ」

「大角文次の大角建設か。つまり大角組ね。小さいけど、裏はなかなか過激だって噂だな」

色川さんはおどけて肩をすくめ、脅えるようなポーズをとってみせた。

「あの原宿のマンションを調べていくと、部屋が購入された二、三か月前に、公共工事の入札で不分明なのが何件かあるんだ。埼玉と茨城の道路と公園。それに栃木のダム。まだバブルの頃だけだね。しかも背後に、代議士の船戸川善治郎の臭いがプンプンするんだ」

「船戸川善治郎って、よくテレビで偉そうに喋っているわりには、選挙になると夫婦で土下座してみせる奴ですよ。それにしても、辛島さん。よくそんな内部情報がキャッチできましたね」

「いや、なに。情報源があるんだよ。建築家の鷲巣数光。昔のいわゆる『七奉行』の一人だった男さ。昔、ある取材で知り合ってね。それ以来の付き合いなんだが、妙に奴とは気が合ってるねえ」

「鷲巣って、丹下建設本社ビルの設計者でしょ。つまり会社を裏切ったわけですか？」

「そういうことになるかな。変わった男でねえ。作品も変わっているが。……彼は、何年か前に出所してきたんだ。殺人で確か懲役五年だったところを、模範囚で一、二年減らされた」

「殺人。また、どうして」

僕と色川さんは、同時に顔をあげた。

「父親殺しさ。『建築家の殺人』として、当時新聞にデカデカと載っていたよ。あの頃は有望な若手建築家でね。丹下建設を辞めた後、乃木坂に独立した設計事務所を構え、海外の設計競技によく出品していたんだが。奴はあれで人生、誤ったんだ」

辛島さんはそこでパイプをくわえ、両手を組んで眉間に深い皺を刻み、目を閉じた。

「さてと、もう時間だな。これから秋川市まで帰らなきゃならない。娘が英語を見てくれって、うるさいんだ。情けないマイホームパパさ。鷲巣数光のこと、もし興味があるなら、次回話してあげるよ。それはそうと、羽木務君だっけ。キミに頼みがあるんだ」

「何でしょうか」僕は中腰になった。

「僕はあの会社に切られたわけだが、キミはまだそうじゃない。羽木君に、胃カメラになって欲しいんだよ。内視鏡にね」

「胃カメラ？ そのつまり、丹下建設の情報提供ってことですか」

「そういうこと」

僕は何とも不安な気持になった。

――そのとき不意に、妙な機械音が鳴った。

色川氏はきょとんとし、「あ、俺か」と言って、慌てて携帯電話を取り出した。

人を馬鹿にしたような、変な着信音だ。

――もしもし、はい色川です。ア、笠置部長。ドモ。毎度お世話様でございます。

先日は誠に済みませんでした。いや、本当にもう、その節はご迷惑をおかけいたしまして。

……ハッ。いや、こちらの全面的なミスでございます。納期ですか？

たぶん、来週の頭ということで進行していると存じますが。

あ、それはもう決して。

よくよく注意しておきますので。それは何とか、ひたすらにもう……。

色川さんは普段とはうってかわって、営業用の猫撫で声を出していた。

こちらに背を向け、自分と携帯電話だけの小世界に入り込んでいる。冷汗をかいているのか、しきりにハンケチを額に当てている。僕と辛島さんは、苦笑しながら水割りを啜った。さっきの源さんと呼ばれる職人ふうの男は、すでに片腕を枕にしてカウンターで潰れている。

ママさんは腕組みをしながら、にやにやしていた。

――はい。こちらこそ、よろしく願いいたしますです。

では、ごめんくださいませ。

色川さんは電話を終わると「フーッ」と言ってカウンターに両腕を投げ出し、俯せになった。

「まいったあー」

「お仕事、ごくろうさま」ママは氷塊の入った新しい水割りを差し出した。

「うるせえんだ、またこいつはヨ。せこい野郎でさ。ペッ、ペッ！」

彼は濃い髪をかき耨りながら、携帯電話に向かって吐き捨てるように言った。

「会話になってなかったですよ、色川さん」僕は皮肉る。

「チッ、俺の弟分のくせに、余計なことを」

彼は鼻に皺を寄せ、ごくりとバーボンを飲み干した。そして眉間に皺をよせ、悲しそうに薄暗い天井を見あげると、

「あーあ、生きていくって、大変だなあ」と情けなさそうにぼやいた。

(続く)

6章 <http://p.booklog.jp/book/97814/read>